

パラグアイで学んだこと

末光 ゆき子

勤務助産婦(茨城県)

たくましいパラグアイの女性

私は1997年から2年間、青年海外協力隊員として南米のパラグアイ共和国に派遣された。25時間飛行機に乗りつづけ、ふらふらになってようやく到着したパラグアイ。日本からみると地球の正反対の国である。途上国の地方都市への派遣であり、比較的条件的の良い暮らしが予想された。しかし……。異文化の中で暮らすというのは難しい。本来の自分を取り戻すまで半年かかった。

赴任先で用意されていた住居は、若い女子学生たちと共同生活する寄宿舎だった。自炊生活が始まったある日、夕食の支度をするため、共同の冷蔵庫にしまっておいた野菜類を取りに行った。炎天下の中1時間以上歩いて買ってきたものだった。しかし、半開きのドアを開けると、冷蔵庫の一番上の段の、解凍されかかった牛肉のかたまりから、血汁がしたたり落ちていた。皿にも載せられず裸のまま収納されていたのだ。すべてのものが生肉の血に染まって見えた。それまでの現地生活の疲れが一気に爆発した。現地の人と同じものを食べて、同じ生活をするということがどういうことなのか、初めて分かった気がした。

消費生活がどんどんエスカレートしつつあった日本を否定し、この道に飛び込んでみたものの、ぬくぬくとした環境にすでに心も身体も染まっていた自分に愕然とした。

私の怒りの声を聞きつけて飛んできた女の子は、19歳。私は「なにかもこんな不衛生な使い方では、耐えられない!」涙声で怒りをぶつけた。

しかし彼女は面白そうに笑いながら、冷蔵庫の掃除を始めた。彼女は、住居費を免除してもらい代わりに、宿舎の掃除係として働きながら学校へ通っていた。一般の学生たちは、いつも共同生活空間を汚す一方だった。この宿舎は職場から遠かったこともあり、まもなく引っ越すこととなったが、私が怒りをぶつけたドジーは、パラグアイでできた初めての友人で、その後、家族ぐるみのおつきあいするほどの仲となった。

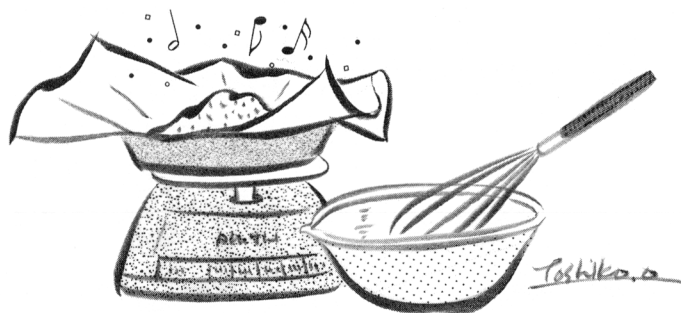
保守的なパラグアイ人が多い中で、ドジーの目は世界に向いて輝いていた。そして信仰深かった。信者でもない私を熱心にミサに誘ってくれ、純粹そのものだった。彼女は将来、故郷やパラグアイの人々のために活躍したいと教会関係の援助を受け、現在コロンビアの修道女を養成する大学で勉強している。

ドジーのみならず、パラグアイ人の女性は、たくましかった。未婚の母が大勢いたが、家族や親類が何とか育てていた。

南米全体の中では、パラグアイ人はおとなしい国民性と聞いていたものの、日本人である私には彼らの弁舌ぶりにいつも舌を巻いた。子どもも大人も自己主張が強く、熱弁を振るう。日本人の美とされる感情を抑えること、奥ゆかしさ、謙虚さなどで対応すると、逆効果を招くことになった。

西洋医療と独自の医療文化と

医師たちは、給料の遅配が常態化していた勤務先の公立病院で、ストライキを長期に繰り返しながら、私立の病院で稼いでいた。公立病院の他の



職員の働きぶりに怒りや幻滅を覚えることもあったが、待遇の悪さを考えれば、やむを得ない面もあった。

● 地方の村落には診療所があるのだが、医師は常駐せず、手術はできない。正看護婦、助産婦もほとんどが町の大きい病院に勤務する。逆子の産婦が何十キロも離れた村から私の勤務先の病院まで運ばれて来たが、すでに手遅れで死産となったことなど珍しくはなかった。

病院では、日本以上に医療者側が優位に立っていた。産婦たちは自分の希望や要求を訴えることなく、黙々と分娩に耐えているような印象だった。目の前で死産が進行していても、おしゃべりや冗談を言い合ってふざけた態度で立ち会う医師や現場の助産婦たちには、なじみきれなかった。しかし一方で、毎日美声で鼻歌を歌い、はつらつと仕事をしているスタッフが実に楽しそうに見える、うらやましかった。思い出せば、日本の看護婦や助産婦はなんて疲れていたことか……。

● パラグアイでは暇さえあれば、いや暇を作りだしてでも、テレレという回しのみのお茶をみんなで飲む習慣がある。肉食中心の食生活のため、このお茶が野菜の代わりの貴重なビタミン・ミネラル源となっていた。テレレを飲みながら一日中おしゃべりをして、時々思い出したように仕事に就く。このテレレも含めた、薬草の文化は伝統的で、中国の漢方にも似た奥の深いものだ。

このような薬草を用いて自然治癒力を促す独自の医療文化がありながら、西洋医療への過度な傾倒が見られた。一方、エンピリカという自然分娩

に近い形の分娩介助を行なう伝統産婆の再教育にも力を入れていたが、産婆の高齢化のため、いずれは大半の出産が施設分娩へ吸収されることが予想された。日本の出産の歴史をふり返れば、出産の場所・形態が自宅分娩から施設分娩中心型へ代わり、再び今、自然分娩、家族に囲まれた家庭的な出産が見直されつつある。その現在の日本から見ると、残念にも思われた。せっかくの習慣や文化を、何とか存続できないものかと、模索し考え続けた2年間だった。

自国への誇りに目覚める

「援助、援助」と言っても、一方的に技術や物資のみを与えることだけが援助ではなく、その国の人が自国のために行なう活動をサポートする役目だが、またとても重要であるという。ドジーをはじめとする地域のリーダー的人材を見つけたし、有効に彼らの活動を支えていくことが私たちボランティアの役目だった。エネルギーな彼女たちと活動するうちに、逆にファイトを与えてもらった。長い回り道をして、私が忘れかけていたものを彼らを通じて思い出させてもらった。それは、自国への誇り、その国の文化・習慣の重みである。いつの日か、ドジーのようなパラグアイ人が、パラグアイ国のために活躍する日が来るであろう。そして私も、ようやく日本を素直に愛し、大切にしたいと思えるようになったことが、この2年間の最大の収穫である。

今回は、青森で活躍する仲間、江渡綾子さんにお願いします。(すえみつ・ゆきこ)